

つぶての祈り

倉園沙樹子 著



本の泉社・1760円

くらその・さきこ
56年生まれ。元高校教師、日本民主主義文学会会員。著書に『巨艦の幻影』

種を蒔き続けることを諦めない

本紙連載時に挿絵を担当した町田李句さんのカバールスト、瑞々しいタッチで描かれた高校生たちが目を引く。ページを繰れば登場人物紹介があり、書籍ならではの作りとなっている。連載を読んでいた方にも、ぜひ手にしてもらいたい一冊だ。主人公は入試問題を解くだけ

の授業に疑問を持つ国語教師、大崎麻衣子。国語教師ならではの発想で、さまざまな社会問題を生徒に考えさせる「論文作成」という授業を考えつき、生徒たちを切り込んでいく。しかし教科書もマニュアルもない、ゼロから授業を創り上げる作業は手間がかかる。資料を集めるのも

一苦勞だ。さらに私語の多い授業、テストの点をめぐる生徒との攻防、頭髪指導。麻衣子はこの指導が本当に生徒のためになるのかと葛藤しつつ、生徒との関わりの中でしだいに彼らの抱えるものが見えてくる。

貧困、在日、トランスジェンダー、ヤングケアラー、多様な社会問題を作者は巧みに練り込み、個性的な生徒や教師に託す。社会問題を反映するかのように入場人物が多いが、冒頭の人物紹介が読者を導いてくれる。

もう一人の主人公、瑠愛は「論文作成」を受講した女子生徒だ。小学校の授業で観た従軍慰安婦

の映像が忘れられず、論文のテーマに選ぶ。多くの本を読み、悩み、考え抜く。そして場面緘黙症だったかつての自分に向き合っていく。瑠愛の思考が、過去の悲惨な出来事から、自身自身の問題として問い直されていく様子は考えさせられる。最終章のタイトルは「はるかに遠い」。教師が蒔いた種が実を結ぶのはずっと先。なしのつぶてかもしれない。それでも、そこが「教育」なのだという作者の祈りのような信念が胸を打つ。はるかに遠い、でもその先の景色を私はみたい。そう願う人が大勢いたなら、きつと希望はそこにある。麻衣子が生徒に種を蒔き続けることを諦めないように、私たちにも諦めないにかがきつとあるはずだ。

評者 秋元いずみ 日本民主主義文学会会員